

夏目漱石

何故に小説を書くか

何故に小説を書くか

文芸のために吾^わが終生を捧^{ささ}げんと言^いえる意^い気^きをもつてその第一歩に入^いれるもの、しばらくにして文芸の意^い義^ぎのあまりに空^{くう}虚^こにして権^{けん}威^いなきがごとくに感^{かん}じ「何^{なに}故^{ごと}に小^{せう}説^{せつ}を書^かかざるべからざるか」と言^いえる疑^ぎ問^{もん}を抱^{いだ}きてこれに悶^{もだ}ゆる者^{もの}少^{すくな}からずを見^みる。苦^く吟^{いん}懊^{おう}惱^{なう}、骨^{こつ}を削^{けず}つて文字^{もんじ}となすもの、単^{たん}に生^{せい}き^んがためにすぎざるか、さらに尊^{そん}き^げ値^ちと深^{ふか}き意^い義^ぎとを自^じ覚^{かく}せざるためか、これを現^{げん}代^{だい}知^ち名^{めい}の作^{さく}家^かに問^とうてその偽^{いつわ}らざる感^{かん}想^{さう}を掲^かぐるは、無^む用^{よう}の業^{ごう}にあらざるを知るなり。

偉いことを言えばいくらでもあるだろうが、一言にして言えば何も無い。

「何故に小説を書くか」と、分わかったような質問ではあるが、なぜ飯を食うか——とそれとは違ちがうが、まず似たような質問で、甘うまいから食うとも言えれば、腹すが空いたから食うとも言える。また食いたいから食うとも言えれば、生なまきたいから食うとも、あるいは、下女げにょが膳ぜんを持ってくるから食うとも言える。

小説を書くのも、単に一つや二つの理由で書くのではないから、それを一々いろいろな方面から完全に答えようとするれば、二日ふつかや三日みっかはかゝって話さねばならぬ大問題である。今ここでちよつと話すわけにはゆかぬ。それかといって即答するなれば、多くの理由の中から一つの理由を抽象して話すにすぎないので、ごく不完全な答えで一部を掩おおうぐらいのものである。それでは聞いた人も満足を得られなければ、話す者も充みちたらない。それに一言にして尽くしてしまうと、またそれに反対した理由があるので困る。自身の従事している職業の理由を問われて、

欠点のあるような答えはしたくない。

たとえば、私は今、大学の教師を止めて、小説を書くために新聞社から月給を貰^{もら}って、それで生活している。つまり一口に言ってしまうえば、食うために小説を書いているとも言われるのだ。が、その反対に、食えない身分にもしもなった時にでも、あるいは小説を書きたくて書くかもしれない。しからば、今ここで食うために小説を書くと答えてみたところで、その答えは決して完全なものじゃない。

小説を書く理由は複雑で今ここで一言に答えることは

できぬ。

(明治四一・一〇・一 『新潮』)

日本文学電子図書館

何故に小説を書くか

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 6 卷」角川書店
昭和42年7月30日 5版発行

日本文学電子図書館